

平成二十六年読書感想文・韻文コンクール作品集

もろへ

大分工業高等専門学校

学生図書委員会

図書館運営委員会

読書と人生

図書館長 穴井孝義

人の一生は一度限りのものです。もしタイムマシンがあれば、人生を何度もやり直すことができるのですが、残念ながらそうはいきませんね。子供の頃、私は「大きくなったら自分は新幹線の運転士になるんだ」とか「政治家になるんだ」と将来なりたい職業を心に描いてはワクワクしていましたが、いざ大人になると実際に自分が選べる職業は一つだけ。さらに、家庭を持てば転職という手段も困難になります。

しかし、世の中には一人でいろいろな職業を体験できる人がいます。そう、「俳優」です。私も若い頃、俳優という職業にあこがれた時期がありました。時には刑事役、時には殿様役、また時には教師や弁護士、医者役。いやあ、俳優は羨ましい限り。多種多様な職業を体験できるので、きつと飽きのこない人生を送れるでしょう。しかし、俳優が誰にでもできる職業でないことは皆さんもお分かりですね。悲しくもないのに涙を流さなければならなかったり、楽しくもないのにケラケラと笑わなければならなかったりと、この職業が如何に天賦の才を求められるものであるか。

さて、目を転じてみましょう。確かに、俳優業は誰にでもできるものではないのですが、「読

書」を通して私達は間接的に多様な職業体験をすることが可能です。時には荒波を渡り行く海賊になったり、殺人事件を難なく解決する名探偵になったり、豪華絢爛な生活を満喫する中世の王族になったり。さらには、宇宙飛行士となって別の惑星へ飛行することもできます。あいにく、そういった役をいくら演じていても俳優業と違い金銭面での収入はありませんが、一言では表現しきれないような「爽快感」「充実感」「幸福感」といった「豊かな心」を得ることができず。なんと素晴らしいことでしょう。きつい稽古や練習もせずに、俳優業よりもさらに多くの様々な人生体験を味わえるのですから。ましてや、図書館を利用すれば、そういった疑似体験がタダで得られるのですから、図書館を利用しない手はありませんね。

今は教師の道を歩む私も、ふと「もし別の道を行っていたら、今頃はどんな人生を送っていただろう」と思うことがあります。そんな時は、図書館で自分が就いてみたかった職業を扱う本を借り、その未経験の世界に浸ることにしています。まだ具体的な将来像を抱けていない人は、まず、読書を通して多様な職業を疑似体験してから将来の職業を絞ってみるのもいいかもしれませんよ。

一度しかない人生、読書を通して、より実りあるものにしていきましょう。皆さん、もっと図書館を活用していきましょう。

平成二十六年 読書感想文・韻文コンクール作品募集

1. 募集部門

A部門 読書感想文の部（本は自由選択）
四〇〇字詰め原稿用紙で四枚～五枚。

B部門 韻文の部

- ア 短歌の部
- イ 俳句の部
- ウ 詩の部

2. 提出締切日

九月一日（月）

3. 提出先

各クラスの図書委員

4. 表彰（合計十三作品）

A部門 十作品

B部門 ア～ウの部からそれぞれ一作品
（計三作品）

5. 選考・選者

A部門 読書感想文の部

国語科教員・学生図書委員・
図書館運営委員・図書館長

B部門 韻文の部

詩 青木 繁美氏

（本校第一回卒業生・詩誌『心象』同人）

短歌 竹内乃里子氏

（本校非常勤講師・歌誌『歌帖』編集委員）

俳句 山田 繁伸氏

（本校教員・日本ペンクラブ会員）

目次

	読書感想文の部	図書館長	穴井孝義	
	第1位	聴く力		
		―『フィンランド教育 成功のメソッド』を読んで	電気電子工学科	二年
				平野音瑠
				……
				1
	第2位	母と子		
		―『ハッピーバースデー』を読んで	電気電子工学科	三年
				箕井梨乃
				……
				2
	第3位	心に響く言葉		
		―『置かれた場所で咲きなさい』を読んで	電気電子工学科	三年
				佐藤 駿
				……
				3
詩の部	最優秀作	「気づく」	情報工学科	二年
	佳作	「いつから世界は」	電気電子工学科	二年
		「空」	情報工学科	三年
		詩選評		青木 繁美
				……
				4
読書感想文の部	佳作	国の護り	機械工学科	一年
		―『氷雪の門』を読んで		石川 耕雪
				……
				5
	〃	存在しない正真正銘の悪	情報工学科	一年
		―『告白』を読んで		工藤 琴乃
				……
				6

人は見掛けか
―「形」を読んで

知足と安樂死

―「高瀬舟」を読んで

失敗に学ぶ

―『負けかたの極意』を読んで

一番怖い人間とは

―「沈黙」を読んで

大きな夢とくじけない心

―『心の国境をこえて―アラブの少女ナディア』を読んで

機械工学科 二年 池邊将暉 …… 7

情報工学科 二年 野尻大貴 …… 8

情報工学科 三年 伊藤有汰 …… 9

情報工学科 三年 中本敦子 …… 10

都市・環境工学科 三年 須賀紗代子 …… 11

短歌の部

最優秀作・佳作

短歌選評

竹内乃里子 …… 12
…… 12

俳句の部

最優秀作・佳作

俳句選評・講評その他

山田繁伸 …… 13
…… 14

編集後記

学生図書委員長

平野瑠唯

(電気電子工学科四年)

第1位

聴く力

『フィンランド教育成功のメソッド』
を読んで

電気電子工学科 二年

平野 音瑠

「聴いている」と「聞いている」、どちらも読みは「きいている」です。しかし、この二つには大きな違いがあり、そして、この「聴いている」というのがとても大切な事なのだ。『フィンランド教育成功のメソッド』という本を読んで気付かされました。人の話を聴くなど当たり前、わざわざ教育論として語らなくても分かってきている、と思うかもしれませんが、私たちは本当に聴くことができるのでしょうか。ただ聞いているだけなのかもしれません。

フィンランドでは「聴く力」を幼い時から養うことが出来る教育をしています。それは読み聞かせです。日本でもやっていること、と思うかもしれませんがフィンランドのそれは大きく違います。日本では、子ども達に絵を見せながら読み聞かせをしています。しかし、フィンランドでは、絵を見せないで読み聞かせをします。絵を見せるか見せないか、ただそれだけの違いですが、大きな違いです。絵を見せると、自分で想像しなくても与えられているため注意深く聞かなくても容易にイメージできます。しかし、絵を見せなければ

自分の頭でイメージをふくらませて想像しなければなりません。そして、想像するためにはよく聴かなければならないのです。このようにしてフィンランドでは聴く力を養っているのです。想像するなら共通の絵が初めからあったほうがいい、そんなふうには聴く力をつけたからどうなるのかなどと思う人もいるかもしれませんが、しかし、この聴く力こそ社会の中で大切なのだと思います。例えば友だちと話している時、そこにはいつも共通の絵があるでしょうか。さらに、会社で指示を受ける時、絵や図を用いてくれるでしょうか。必ずしもそうでないと思います。そのような場合、必要となってくるのが聴く力だと思えます。初めから絵が与えられることになっていては想像することが難しく、聞き逃すこともあるのではないのでしょうか。それが、友だちとの意志のズレや仕事での失敗につながると私は思います。

さらに、フィンランド教育において、「聴く」というのは、ただ相手の話に耳を傾けるだけでなく、自分の意志表示をすることでもあるのです。では、意志表示とは何を指すのか、それは、リアクションをとることです。聴くことによつて想像力は高くなります。しかし、それでも相手の想像しているものとはズレてしまいます。相手の頭の中を見ることは出来ないの当然ではあります。しかし、その互いの想像を近づけることは出来ます。聴いて、リアクションをとることによつて出来るのです。では、リアクションとは何

をすればよいのでしょうか。それはとても簡単なことです。「うなずき」「オウム返し」「要約」「わからないという意志表示」です。これを行うことで互いに想像していることが近づき相手を理解することにつながるのです。私自身の体験でも、この四つのリアクションを取ることはとても大切だと思ふことが何度もありました。友だちと話している時、相手の話を聞きながら、自分の今までの経験の元にして勝手にイメージしていたけれど、話を聞くにつれて想像していたものとのズレがあり、結局、違うものを頭に描いていたということがありました。これは、私が相手の話をしっかりと聴いていなかったのだと、この本を読んで気付かされました。うなづきながらオウム返しをしていれば、相手は自分の話を聞いてくれると思ってもっと細かい情報をくれたかもしれない、要約をしてわからないところを尋ねればイメージの違いを修正できたでしょう。

このように聴くということは社会で生き、人と関わる時にとっても大切なことなのだと思います。そして、その「聴く力」を養うことに力を入れているフィンランドの教育にとっても興味があります。日本の教育にもフィンランド教育の良い点を取り入れ、より良い教育をめざしてほしいと思います。今後は、このフィンランド教育を生活に生かす、人の話を聴くことで想像力を高め、意志表示をして相互理解を深めていきたいと思ひました。

母と子
—『ハッピーバースデー』を読んで

電気電子工学科 三年

箕井 梨乃

青いカバーに白く咲いた杏の花。私は本のカバーの印象で買うか決めることが多い。もともと絵をかくことが好きなこともあり、きれいに描かれたこの本はすぐに私のお気に入りになった。

しかし、本を読み進めていくうちに、この鮮やかな絵に似合わない内容に私はとても衝撃を受けた。

「あんななんか、生まなきやよかった」
母親が娘に言い放った言葉。母親は子供を愛し、子供の幸せを願って大切に育てていくものだと私は思う。自分の命をかけて、また何時間も痛みにたえてやつと生まれてきた子供にこんな言葉を言えるなんて考えたことがなかった。

私はまだ十八歳で親に面倒をもらって学校に行かせてもらって、もちろん子供を産んだこともない。母親の気持ちなんて正直わからない。しかし、そんな私でさえあの言葉を言っただけではないことはわかる。

私は一度母に聞いてみたことがある。
「私のこと殺したいって思ったことがある？」

別に深い意味で聞いたわけではない。昔の話を聞いていて、女手一つで三人の娘を育てた母の苦労は数えきれないことを知って、ふと聞いてみたのだ。母の答えはこうだった。

「そりゃ何回はあるよ。家族心中しようかとも思ったこともある。私一人で三人を養えるわけがないと思っただけ。でも色んな人に助けられ、こうやって三人みんな無事に育ち生きてくれた。私たちは幸せ者だね。」

この答えに私は驚いた。てっきり殺したいって思ったことなんてないよ、と言われると思っただけ。しかし、この答えには私がここまで育つまでの母の苦労とつらさがにじみでいた。私もまた助けてくれた色んな人に感謝し、母に感謝した。

私は偶然恵まれて育ったが、この本の主人公あすかは違った。大好きな母に言われた衝撃で声を失ってしまったのだ。この悲しみを誰にも受けとめてくれず、ただただ自分の殻に閉じこもっていくあすかの姿を読むのはつらく、つい読むスピードをはやめた。

そんなあすかを救ったのは、あすかの祖父と祖母である。あすかの空っぽの心に優しくあたたかい愛をあたえいつしか、あすかは元気をとりもどし声をとりもどした。ここで私も笑顔になることができた。

あすかには祖父と祖母という存在がいることで助けられた。しかし、周りを見るとどうだろ

う。母が子供に暴力をふるう、食事をあたえない、という報道を新聞やテレビでよく見る。時には死にいたることもある。こういう子供はどいうやって助けることができるんだろう。私にはまだわからない。あすかの祖父や祖母のようなあたたかい人に出会えることを願うばかりである。

私はこの夏休み、フィリピンに行った。私は足踏みミシン部というものに入っている。今は使われなくなった足踏みミシンを回収し、分解して磨き、また組み立てをし縫うことができるようにする。そして復活した足踏みミシンをフィリピンの貧しい人達に送るボランティアをしている。フィリピンでは貧富の差がとても激しく、仕事がない人も多い。だから足踏みミシンをもらうことによつて仕事につけ、家族を養うことができ、子供を学校に行かせてあげられると、涙を流しながら喜んでくれる。仕事がないと家族を養えず、食べ物もあたえられず、自分の心に余裕がなくなり、子供もあすかのように心を閉ざしてしまうかもしれない。そんなふうになつてほしくない。

また、今回は去年津波で被災したレイテ島にもいった。半年も経つというのに全然復興していなかった。家はくずれ、鉄も水圧でまがっており、がれきだらけ。報道で見たことはあったが実際に見ると予想以上に衝撃的だった。私はここの現地の人達は大丈夫だろうかと思った。

津波で心を閉ざしていないか不安だった。しかし、フィリピンの人たちはみんな私たちを笑顔で迎えてくれた。もちろん、子供たちもかわいらしい笑顔をむけてくれた。みんなとても優しく、ミシンがきてとても嬉しそうだった。私は心から安堵した。

世界中には心を閉ざした子供たちがたくさんいる。もちろん日本にも。私はそんな子供たちがあすかの祖父や祖母のような人によって幸せになることを願っている。また自分もそのような人になりたいと思う。

そして私はこれからもミシン活動をつづけ少しでもフィリピンの人たちの助けになっていくことを願う。

第3位

心に響く言葉

—「置かれた場所で咲きなさい」
を読んで

電気電子工学科 三年

佐藤 駿

私がこの本を読んで考えさせられ心に残っている言葉は、「どんなところに置かれても花を咲かせる心を持ち続けよう」という言葉です。私も人間関係がうまくいかず、つらかったり、理不尽だったり、信じていたのに相手から裏切られたりしたことがあります。その時に自分は、人を変えるのは難しいから自分を変えよう

として、いつもより今までよりも相手が困っているときに助けてあげたり、アンテナを張って気づけるようにしていたのを思い出します。この言葉でいう花を咲かせる心は、自分なりに努力することではないかと思いました。自分で境遇を選ぶこともできないからです。しかし自分の過ごし方や対応を変えることはいくらでもできます。だから、今いる場所で最善をつくしなさいということを作者は述べたのかと思います。作者はひどい境遇になってしまったら、「神様が私に授けてくれた試練でプレゼント」だというように考えるそうです。この言葉は心に深く残りました。

また、「つらい日々も笑える日につながっている」「苦しい峠でも必ず下り坂になる」という言葉も感動しました。私は中学校のときに辛い思いをしたのですが、そのときも明日は良い日になってくれとか、もう自分はこんなに苦しい思いをしたんだ、きつと先はずつと楽しいことが起こるに違いないと考えていました。そう考えていると気持ちが一変になり、友達と話をしたり遊んだりするときに、気持ちをうまく切り替えることができました。だからこの言葉も深く心に刻まれました。誰でも本当に苦しいときは、作者のように考えてしまうのではないかと思います。

「求めなさい。そうすれば与えられる」という言葉も感動しました。自分が何かして欲しい

と思ったときに、人にもしてあげるといふ気持ちが大変だと思いました。そうしないと持ちつ持たれつのように相手との距離を縮めることができなくてコミュニケーションもとれないからです。自分が優しくされたいのなら相手にも親切にし、助けてあげ、二人共に仲良しになって初めて相手に求められると思いました。人間関係を良好にするには必要なことだと感じました。そして「きれいさはお金で買えるが、心の美しさは買えない」という言葉から私は、外見は自分で努力しなくてもきれいにいくらでも良くできるが、内面は経験つまり人とどれほど関わったかによって変わるのではないかと思いました。自分が嫌みを言われて傷ついたのなら自分は相手には絶対言わないように過去に辛い思いをしただけきれいな心を持って相手に接することができるのではないかと思います。つまり私が感動して挙げた言葉は、どれもつながっていて、今現在、苦しいのならそれを神様からのプレゼントと思い明日は必ずいい日になると考え、きつと将来人に私は優しくできるんだと思つて、これから先も生きたいと思えます。そしてもし自分が人を傷つけてしまったら反省して必ずフォローの言葉を言つて仲間や友達と仲良く円滑にコミュニケーションをとれるようにしたいです。

韻文部門 詩の部

最優秀作

「気づく」

情報工学科 二年 芦 刈 茉奈美

渚に独り立っている

どこまでも黒い闇の中で独り
どこまでも黒い水面を
ただ眺めている

ふと

水面を照らす月の光に気づく

それは

量り知れない黒に反射して
私の心にすっと入ってくる

私の全てを優しく

揺られて

ふと

どこからか届く声に気づく

それは

水面を照らす光とともに
冷えて固まった心を溶かす

私の耳を優しく

撫でるように

触れて

わたしは気づく
わたしの道が示されていることに
その道が
けっして暗くないことに

佳作

「5Gから世界は」

電気電子工学科 二年 矢野 拓海

いつから世界は
こんなに小さくなったのだろう

どこまでも続く空の下
掌の中の「2GB」の海に振り回され
溺れている

いつから僕は

こんなに小さくなったのだろう
果てしもなく広がる大地の上
眼の前の「0と1」の山に苛立って
疑い始めている

ほら

顔を上げればそこら中に

世界がある

まだ見たこともない世界が
身を潜めている

見つけよう

自分だけの世界
行こう 今の自分の向こうへ

「空」

情報工学科 三年 渡 邊 理紗子

青いあおい空

広いひろい空
ふと立ち止まって

空を見上げたら

何かがザーッと落ちてきて

わけもなく

少し泣きそうになった

詩選評

青木 繁美

私たちはいつでも、何かに苛立ち何かに怯え、不安であり癒しを希求し、何かを掴んだと思うその何かに失望して、そのやりきれない想いや感情を表す手段を探している。まして、多感な時代を生きている若者たちにとって、自分との葛藤の最中の重苦しさの捌け口を探すことは決して容易ではなからう。スポーツでも音楽でも、美術でも文学でも多様なメディアでも構わない。その表現手段を手に入れることは、揺れる時間の舟の上のような毎日をもっと豊かにしてくれると思う。

今回読ませていただいた一年生から三年生までの三十篇ほどの作品も、何とない不安や苛立ちや怒り、疑問などが、身辺のさまざまな事象に心を寄せて、素直に表現されていて好感が持てた。また、遠い先の光明を求めて疑われない心にも救われた。作品に現れた想いに優劣はなく、その想いがより素直に、より明瞭に表現されていると思う作品を選ばせていただいた。多くの作品を作るにより表現を磨いていくことを期待している。

佳作

「国の護り —『冰雪の門』を読んで

機械工学科 一年

石川 耕 雪

みなさんは「九人の乙女」と呼ばれる方々を知っているだろうか。

先日、私はこの冰雪の門という本を読んだ後に北方領土視察研修旅行という旅行で北海道の地を訪れ、「九人の乙女」のことを勉強した。

一九四五年八月十日、ソ連軍は当時、日本の領地であった南樺太へと侵攻してきた。その五日後の一九四五年八月十五日、日本はポツダム宣言を受諾し、終戦を迎えるもソ連軍は「敗戦国に領土権を主張する権利はない」と樺太はほとんど占領されていった。その頃、樺太全土には婦女子への強制疎開命令が出されたが、樺太にあつた真岡郵便局で働く女性の電話交換手たちは、「私たちがこの仕事を辞めてしまうと樺太全土の通信回線が滞り、混乱に陥ってしまう」として、最期の時までその職務を全うした。そして、彼女たちは通信から各地で次々に被害される市民の状況を知り、彼女たちも自ら青酸カリを飲んで自決してしまった。

現在、生きている人の多くがこの「九人の乙女」たちのことを知らないだろう。ましてや、

南樺太が日本の領地であつたということですから認識が薄らいでいるようだ。しかし、このような歴史は絶対に知っておくべきことであるし、後世へと伝えていかないといけないことでもある。私がそう思うのには私自身の特別な思いがある。

それは、この国を自分たち自身の手で護っていくべきだという思いだ。

今日の日本には自衛隊という国防軍は一応あるものの行える軍事情報の範囲は狭く、また自衛隊は国民全体の奉仕者であるにも関わらず、国民から向けられる眼差しにはいささか冷やかなものを感じる。さらに、国内では自衛隊廃止論を唱える人々や、そもそも自衛隊の存在は日本国憲法の第九条に反するのではないかとする人たちがいる。このようにして未だに国内で意見が統一されていないのが現状である。もし、このような状況で外国が日本へと攻め入ってきたらどうなってしまうのだろうか。そうなれば、少なくとも今の平和で慎ましい生活は送れなくなってしまう。さらには、侵攻してきた国に領土を奪われてしまうかもしれない。すなわち、私たちの自由は国があつてこそその自由なのである。

今の日本は国民の心がバラバラであるから外国の思想戦略に踊らされ、真実と嘘の見分けがつかなくなっているのだと思う。今のままで推移するとやがて日本は滅びてしまうだろう。私

は二千年来、祖先が築き上げてきたこの国土と民族の誇りを無くすことが非常に耐えられない。だから私は、この「九人の乙女」の話やこの国の素晴らしさを伝えていき、この国をより良い国にしたいのだ。

しかし、この国を私一人の力で変革していくのは到底、不可能だ。

だから、この私の思いが次の人に、また次の人にとり継ぐように伝わっていけば、いずれ世論が変わり、この国がもつともつと素晴らしい国へと変貌を遂げていくであろう。

それが私の思う「国の護り」である。

今日、日本には、多種多様な考えを持った人たちが大勢いる。その中で右翼と呼ばれる人と左翼と呼ばれる人はそれぞれ対照的な考えを持っている。そのような油と水のような関係にある人たちでも平和でありたいと願う気持ちは変わらないはずだ。

だから私はしっかり話し合い、一つの意志のもとで行動すべきだと思う。そうすることで自ずと平和への道が拓けていくのではないかと思う。

一人一人が自分の考えをしっかりと持ち、この国のことを考える日が来ることを願うばかりである。そして、最後にこれを読んで下さった方々が日本の歴史や国際社会での問題に少しでも関心に向けて下されば幸いである。

佳作

存在しない真正銘の悪 —『告白』を読んで

情報工学科 一年

工藤 琴乃

この作品にはたくさんの「悪」がある。読み終えて一番に抱いた感想がこれだ。私にとっての「悪」は「正しくないこと」である。この作品には「善」も「悪」もあった。けれどはつきりとした「真正銘の悪」はなかった。「善」と「悪」が二つで一つとなりこの作品を複雑に形成しているのだ。まるで現実の私達を見ているかのようで、深く印象に残っている。

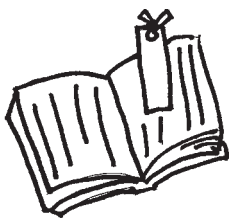
「私は聖職者になりたいなどと思っていませぬ。」—これは生徒二人に愛娘を殺害された森口の台詞だ。彼らの罪を法に委ねたくない。それによってこの事件を終わらせたくない。そういった意思が込められたこの言葉は作中で何度も繰り返されている。彼女は確かに警察に訴えることはしなかった。だが何の行動も取らなかったわけではない。彼女は自らの手で復讐することを選んだのだ。そしてそれは目論んでいた形とは違えど見事に果たされた。もしも私が彼女の立場だったならば、彼女のように行動することは出来ないだろう。罪を法に委ね、自分は現実から目を背けてしまう。復讐することに

対しては賛否があるだろう。関係のない人を巻き込むかもしれない。そこから新たな復讐が生まれるかもしれない。けれどそれらを理由に泣き寝入りするだけが我々に与えられた選択肢なのか。否、違う。森口には愛娘を殺害されたという大きな理由がある。彼女の復讐は無関係の人を巻き込む結果となったが、彼女はそれを覚悟の上で行動したはずだ。それに、そもそも原因は彼女の愛娘を殺害した生徒二人なのだから。彼女の罪はあの事件がなければ発生しなかった。彼女には完全な「悪」は存在していないのだ。

生徒二人にもそれぞれの理由や思惑があった。生徒A 渡辺にはどうしても会いたい人物がいた。幼い頃に別れた母に、罪を犯してでも会いに来てほしかったのだ。生徒B 下村は誰かに認めてもらいたかった。無条件で愛してくれる母の期待に答えられない自分に自信がなかったのだ。愛されない者、愛されている者。立場は違えど母を愛する心は同じだった。そしてそこからくる甘えもだ。子供が母を慕い、愛を求めるのは当然のものだ。けれど彼らは方法を間違えてしまった。そしてその罰として愛した母を失った。このことは彼ら二人を地獄に落ちたかのような深い苦しみを味わうこととなったのである。彼らは互いを見下していた。どうしても相手よりも優位に立ちたかった。その醜い争いの中で森口の娘は命を奪われてしまった。それが

この結果を導いたのである。だがしかし、彼らも「真正銘の悪」ではないのだ。

「悪」とは何か。その答えは一つや二つではない。いや、本当の答えなど存在しないのだろう。私の考える「悪」は先程も述べた通り「正しくないこと」を指す。不純物のない真の悪がそれである。けれどその「悪」の裏に見過ごせない理由が存在していた場合、それが本当に「悪」なのか判断するのは難しくなる。そして「真正銘の悪」は現実には存在しないのだと私は思う。きっと誰もが理由を抱えているはずなのだ。だからこそ私達は、それを本当に悪と切り切りたいのか、正しいことばかりが善なのかを見極めなければならぬ。たくさんの間違いを積み上げ、それを成長の糧にしていく。それが私達の義務でない問題に頭を悩ませ、何かを犠牲にすることに胸を痛め、それでも最後は前へ進めるように己を信じ、周りを導く。それが出来る人間に私はなりたい。



佳作

人は見掛けか ―「形」を読んで

機械工学科 二年

池邊 将暉

若い士は、中村新兵衛の「形」を利用して、見事に手柄を立てた計算高い男である。

「鎗中村」として恐れられた中村新兵衛は、松山新介の侍大将で五畿内中国に聞こえた大豪の士であった。火のような猩々緋の服折りを着て、唐冠纓金の兜を被った彼は魁ヶ殿の功名を重ね、戦場の華であり、敵に対する脅威であり味方にとつては信頼的であった。大和の筒井順慶との戦いの時、初陣であった松山新介の側腹の子である若い士は、その中村に鎧を借してもらえるように頼んだ。中村はその若い士を幼少の頃から守役として我が子のように慈しみ育てて来たこともあり、その頼みを快く受け入れたが、その戦いでは、その若い士は手柄を立てて帰ってくるが、その二番鎗を務めた中村新兵衛は、生きて帰ってくることをさえてできなかったのである。

では、なぜ中村はそんな失敗をしたのだろうか。それは、その若い士を中村が幼少の頃から守役として、我が子のように慈しみ育ててきたこともあるだろうが、中村は自分が築き上げた輝く「形」の影で衰えていった自分の実力に氣

付かず、どんな鎧を着ていようが、今までと同様の成果をあげられると慢心していたからである。

では反対に、なぜ若い士は中村から鎧を借りたのか。幼少の頃から近くで中村のことをみてきた若い士は、あの中村が築いた「形」がどれほど偉大なものであり、その「形」を身にまとった状態で体に傷を負おうものなら、中村の「形」に傷がつくことはわかっていたはずだ。若い士は戦いが始まる前、唐冠の兜を朝日に輝やかしながら敵勢を尻目にかけて、大きく輪乗りをした。これはいつも中村が戦前に行う動作だった。つまり、初陣では、まだ戦闘になれておらず、戦死する可能性があるが、敵に自分を中村新兵衛だと信じこませるにより、戦死する可能性を大幅に下げ、手柄を立てることに成功したのだ。彼はとても思慮深く、計算高い男であった。

侍が活躍する時代は現代と違い、テレビなどのメディアが存在しないため、將軍のような人でも、その者の顔は一部の者しか知らなかった。そのため、鎧などの「形」はその者が確かにその者であることを証明したり、その者の実力を表すなど重要な役割を持っていた。つまり、現代において身分証明にあたると言えよう。戦国時代では、黒漆五枚胴具足といえは伊達政宗と云うように鎧などの「形」は、この世に二つと存在せず、唯一のものであった。しかし、現代においてはそうではない。同じ物を多くつくるこ

とや偽装することができる。そのため、中村から鎧を借りた若い士のように、身分証明を偽り、詐欺を働くなどの犯罪行為が絶えない。

他の者の「形」を利用した行為は犯罪だけではない。代表的なのが、会社がその名前や新商品の紹介を行うテレビのCMだ。そのCMで有名人をうまく利用することで、会社の知名度を上げ、新商品を売り込むことで工業収入を安定させ、また多く得ようとしている。二〇一〇年のクリスマスには、「伊達直人」などの名義で児童相談所に寄付をするという行為（タイガーマスク運動）があった。これは、寄付したその人の名前をつかうよりも、国民的ヒーローであった「伊達直人」の名前をつかうことで、親近感がわき、寄付してもらった側も素直に喜べ、関係のない私も温かい気持ちになったのを今でも覚えていいる。

これらのように、他人の「形」を利用した行為は、この私たちが生活する社会では、昔も現代も変わらず多く存在している。それには、若い士のように自分の利益などを優先させ、他人を不幸にさせるものや、逆に、タイガーマスク運動のように、誰も不幸にせず、多くの関係のない人々までも幸せな気持ちにさせるものなど、多くのものがある。私たちは、「被害者」にならぬよう、相手の本当の「形」を見抜く目を養う必要がある。そして私は、「形」を利用して皆が幸せになる方法を探していきたい。

佳作

知足と安楽死 ―「高瀬舟」を読んで

情報工学科 二年

野尻大貴

高瀬舟とは京都と大阪を結んでいる高瀬川を通る小舟のことである。重い罪を犯し遠島を言い渡された罪人は、京都から大阪へと高瀬舟で送られる。罪人はさまざまな事情を抱えて罪を起し、この舟へ乗ってくる。舟には罪人を護送する同心も一緒に乗る。ある日、その舟に不思議な罪人が乗せられた。これが喜助である。

同心が「一体お前は どう思っているのだい。」と喜助に尋ねると、喜助は島へ行くのは他の罪人には哀しく辛いことなのかもしれないが、給料のほとんどを借金の返済に使い、病気の弟を満足に養えない苦しい生活をしていた自分にはそのことがありがたく、そしてそれに比べ、牢屋での生活は十分に食事をすることができ、多少のお金もあり、島に着いてからもこの生活が続く。だから不満はないのだと話す場面がある。そのとき、自分なら喜助と同じように牢屋での生活を選んでいただろうか。辛く苦しいことから逃れたいときは誰にだってある。しかし、どうしても逃れられないときだってあるはずだ。喜助は本当に満足していたのかもしれない。しかし、

見方を変えてみると、今までたくさんの苦労をしてきたのだから牢屋での生活の中でどんなにきつい仕事があつたとしても、どういうこともないのだという強い気持ちを讀み取ることができると思う。これは自分にも当てはまる。とても苦しく大変なことがあつたときは、今までの人生の中で一番苦しかったことを考えてみる。そしてそれに比べれば、今はそれほど大変ではないのだと自分に言い聞かせることが度々ある。喜助は満足気な表情や強い気持ちの裏に内心このような思いを持っていたのかもしれない。

もう一つ、「色々の事を聞くようだが、お前が今度島へ遣られるのは、人をあやめたからだと言う事だ。己に序にそのわけを話して聞かせてくれぬか。」と同心が喜助に尋ねると、ある日、喜助の弟がこれ以上心配をかけさせまいと自害を図った。しかし、死にきれず喜助は弟のため最後のとどめをさしてやった。そしてこのことが罪に問われて、今ここに居るのだと話す場面がある。弟が死んだのは、兄が殺意を持って殺したからではない。弟のためを思って薬にさせてやったのだ。これは今で言うところの安楽死のようなことだと思ふ。現在でも安楽死について色々な問題がある。テレビでは病人本人やその家族、医師が安楽死に対する意見を言い合っているのをよく目にする。そのとき家族側は延命治療を求め、本人は安楽死を求めていることが多い。それを見ると、安楽死は生きている人間を殺してしま

うためあまりいい思いはしないが、本人にとつてそれが楽になることであるならば全く悪いことではないのかもしれないと思ふ。自分はこういう場合、やはり家族側よりも本人の意思を尊重し、自分から死を求めたくなるほどの苦しみから解放して、最期を看取ってあげることが最良の選択だと思つている。それは家族には哀しいことではあるが、本人に辛く苦しい生活を続けさせていくことも家族には苦しみになると思ふ。だからどんなにその人に長く生きていて欲しくても、安楽死を選択してあげることも大事なのだ。

「高瀬舟」の筆者である森鷗外は、この小説を讀んで安楽死をはじめとする全ての死について改めて考えてもらいたいと思つたのだろう。死ぬということは普段生活する中ではあまり関わることは少ないと思ふし、一度体験してみるということもできない。だからこそ、この小説を通して自分なりに、死についての考えを持つてほしいのだと思ふ。自分は、正直今まで死について真剣に考えたことはない。しかし、死は誰にだっていつかは必ずやつてくるものだ。よくよく考えてみれば死というのは全く遠いものではなく、とても身近なことなんだと思ふ。もしかすると、明日にでも自分が関わるようなことがあるかもしれない。だからこそ、毎日を悔いのないように大切に生きていかなければいけないと思ふ。そして、今世界で生きている全員に一日一日を大切に過ごしてほしい。

佳作

失敗に学ぶ ―『負けかたの極意』を読んで

情報工学科 三年

伊藤 有 汰

私はこの本を読んで、まず「失敗は成功のもと」という言葉を改めて実感させられた。

作者の「人は勝利から学ばない」という言葉は、まさにその通りだと思った。例えば、スポーツの場合は、勝利するとその喜びから、小さなミスを振り返らずに忘れてしまい、同じミスを繰り返してしまうこともある。勉強ならばテスト勉強をまともにせずたまたま高得点を取ったときに「自分はやらなくてもできるんだ」と勘違いしてしまうこともあるだろうと思う。

何かに勝つことは、人間を成長させるいい経験になるのは間違いない。また、極端に言えば全ての人間は勝つために生きている。だからこそ、失敗してしまった場合には作者も言うように、それを振り返ってみて原因の分析や修正などを行うことが大切になる。

私も失敗をしてしまったときは、それを振り返り、よく考え、同じミスを二度繰り返さないように生きていこうと考えた。それが完璧にこなせるようになれば人間的に大きく成長することができると思うし、成功する経験もかなり増

えていくと思う。

しかし、取り返しのつかない負け、つまり最悪の事態だけは避けなければならぬとも作者は言う。もし、最悪の事態に直面してしまうと、そこからあわてたところで、どうにもならないことがかなり多くなってしまう。学校で言えば、成績の不振から進級ができなかったり、退学に追い込まれたりすることであろう。これらは、どうにもならないまではいかないが、多大な損失をもたらしてしまうことは間違いない。だから、最悪の事態を頭に浮かべて、日ごろから準備しておくことが大切だ。

この準備というのは、生きていく中でとても重要なことだと思う。「備えあれば憂いなし」という言葉があるように、準備さえしていれば、いざというときの心配が小さくなる。つまり、最悪の事態に直面してしまっても柔軟に対応することができると思う。テストの場合は、テスト勉強という準備をしていけば、最悪の事態に陥ることだけはなくなるだろう。

それだけではなく、さらなる飛躍も期待できると考えられる。準備を完璧にするというのは、もちろん簡単なことではないが、より多くの事に対して準備ができるように私自身も心がけようと思う。

さらに作者は「小事を大切にせよ」と述べている。小さな気付きを大切にすることは、失敗や負けを成功に変え、勝ちに結びつけるために

も非常に大切なことであり、これができるからこそ、失敗の原因を究明し、修正できるのだと思う。

私も小事に気付き、それを大切にしていきたいと思う。私は鈍感なところがあり、気付きもあまり多くないほうだと思うが、気が付けるようによく身の周りを見直してみようと思った。人より多く小事に気付くことができれば、大きな仕事もこなせるようになると私は考えた。

小事の気付きを生かすためにも、作者の「記憶に頼るな、記録に残せ」という言葉はとても重要だと思う。これは、簡単に言えばメモをとれということである。記憶だけでは曖昧になってしまうなど、正しい情報でなくなってしまうことも少なくないが、その場その場でとったメモは確か性が高い。そしてなにより、実際に手を動かして書くことで、脳に刻み込まれる情報量とその精度、確度も高くなるという。

私も重要だと思ったことはなるべくメモをとるようにしている。これからは、面倒だと思ってもよりこまめにメモをとるようにしたいと思う。

私はこの本から、失敗を上手に生かすことができる人が最後に大きな成功を手にすることができるのだと感じた。私自身も小さな事に気付き、失敗をうまく利用できるようになりたいと考えた。

佳作

一番怖い人間とは ―「沈黙」を読んで

情報工学科 三年

中本 敦子

大沢さんが青木のことを話したとき、私は中学生のころを思い出しました。私の学校はとも人数の多い学校で同年でも顔のわからない人がたくさんいました。それほど人数が多いとやはり色々な人がいるもので、中には揉め事を起こし警察ざたになった人もいました。友達はそのようなのが嫌だったようで受験をし、別の中学校へ行きました。けれどいざ中学校に行き始めると私が嫌悪感を抱いたのは採め事を起こすような人ではなく、むしろ逆のタイプの人たちでした。彼らは大体、頭が良く運動も得意で見た目も悪くありませんでした。頭の回転が早いからか良くも悪くも口が回ってみんなの人氣者でした。向上心が高く、自分に必要なのはパスパッサと切り捨てていく冷静さと絶対的な自信を感じました。それは悪いことではありません。野心を持つことは大切だと思いません。しかし、全ての物事を自分だけの価値観で測るのはいただけません。彼らが切り捨てたものの中に価値を見出して一生懸命頑張ろうとしている人もいます。他人が見つけたその

価値をわかって努力もせず、彼らは価値のないものと決めつけて馬鹿にしているようにした。

「僕」によると大沢さんは物静かで温厚な性格の持ち主で、誰もが好感を抱いてしまう人物です。それは嫌悪感を感じる青木とは対照的で、彼の趣味や考えを聞いても青木よりずっと大人びて知的な印象を受けます。大沢さんは青木のことを理屈抜きで嫌いな人間だと言います。電車の場面では

「深みもなければ深みを知る心もない。空しくても語っていました。まさに私が中学時代思っていたことを代弁してもらったかのような大沢さんのような素晴らしい人物が同じことを考えていると思うと、自分は間違っていないんだという優越感を感じます。私は青木のような人間に少なからず嫉妬していたのかもしれない。彼らは明るく華やかで充実した学校生活を送っている様子でした。一方私は地味で友達も少なく、担任の先生からも好かれていないふうではありませんでした。彼らの輪の中に入っている自分というのは全く想像ができませんし、あまり入りたいたとも思いません。されど何でもできて、周りの人から無条件で好かれるような人間になってみたかったという憧れも抱いてしまうのです。

「僕が怖いのは青木のような人間ではありません

ん。」

と大沢さんは言います。

「そういう連中は何も理解していないくせに、受け入れやすい他人の意見に踊らされて行動する連中です。」

この言葉はいじめを傍観していた人々だけに向けられたものでしょうか。今まで話したことは、全て大沢さんの目線から見ると、感じたものです。それには何の根拠もなく、他の人から見れば青木は人気者なわけでむしろ好感の持てる人物ということになります。つまり大沢さん自身がこれまで話した「青木」という人間のイメージをそのまま鵜呑みにするなど警告しているのか。結局大沢さんが一番怖いのは私のような人間、ということなのかもしれません。

人によって考え方は千差万別というので、物事を完全に理解できることはないのでしょうか。しかしその「もの」の価値を人は自分の勝手な都合でつけてしまいがちです。自分の考えに捉われることなく、人の意見にも流されすぎたはいけない。自分と他人の間をどうとっていかは非常に難しいですが、広い視野で物事を見つめ、事実を柔軟な心で受け止められる人間を目指したいです。



佳作

大きな夢とくじけない心
—『心の国境をこえて—アラブの少女ナディア』
を読んで

都市・環境工学科 三年

須賀 紗代子

私が、ガリラ・ロンフェデル・アミット作『心の国境をこえて—アラブの少女ナディア』という本を手にとったきっかけは不思議なものであった。図書館でふと目にとまり、「読んで。」と本に語りかけられたような気がしたのである。この本は、医者になって地域医療につくしたいという夢を持ったアラブ人のナディアという少女の物語だ。

私は、ナディアが自分の夢をしっかりと持って、今の自分が何をしなくてはならないかをきちんと分かっているところに感心した。私はまだ漠然とした将来設計しか出来ていない。何になつて、どうしたいという具体的な夢が私には無いのだ。だから、夢を叶えるために村を出て、自分とは生活様式が全く異なる人達と一緒に寄宿学校で学ぶ決意をしたナディアを心の底からすごいと思うし、尊敬する。

しかし、多くの困難が夢へと進むナディアの邪魔をするのだ。寄宿学校で学ぶ生徒のほとんどがユダヤ人であり、アラブ人であるというだけで心無い言葉をかけられたり、好奇の目にさ

らされたりして、「自分はよそ者である」という意識が常にナディアにつきまとつた。

もし、私がナディアの立場であつたらどうだろうか。自分がアラブ人であることに誇りを持つていて、自分の民族のことを何も知らない人達から固定観念で馬鹿にされることに耐えられるだろうか。そして、自分がしたわけでもないテロ行為をアラブ人というだけでひとくりにされて冷たい視線を向けられたとき、逃げだしたりしないだろうか。きっと私は耐えられずに家に帰ってしまうだろう。今まで頑張ってきたことなどでもよくなつて、全てを投げ出してしまふのではないだろうか。

だが、ナディアは逃げださなかつた。何度も挫折しそうになる気持ちを震い立たせながら寄宿学校で学び続けることを決めたのだ。このナディアの強さに私は感動した。ユダヤ人の生徒達から差別的な扱いを受けても、ある一人の生徒の支えによつてもう一度頑張る事を決断したナディア。私はこの一人の生徒やナディアのような人間になりたい。

しかし、自分の事に置き換えて考えたときに私はこの本の中のユダヤ人と同じ事を人にしてはいないだろうか。

「男の子だからこうだ。」

とか、

「女の子だからこうだ。」

などと、私や私の周りの人は言っていない

きれだろうか。このことを考えた時に私は、誰でも知らず知らずのうちに人をグループ化してしまつている気がした。そしてそれらは絶対にこうであるという決めつけから人を傷つけてしまうことがあると考えられるのだ。

私達は、人種や性別でグループ化される前に個人であることを忘れてはならない。私は私であり、友達は友達といったふうに、それぞれが個々の考え方を持つて生きている。この世の中に物の考え方が全て同じ人物など、一人としていないのだ。

そして、その考え方の違いを決して恥じることはない。ナディアは、自分の思いや考えを相手は絶対に分かつてはくれないうと決めつけて伝えずにいた。

だが、私は相手に自分の気持ちを伝えるにはどうするべきかを考えることが一番重要なことであると考えた。議論をすることを避けるのではなく、議論の中で相手の言いたいことを聞き取り、自分の思いも伝えていかななくてはならないのだ。そうすることで人は、様々な考え方があることを知り、互いの主張を聞き入れることで成長し、個人から団体へとなつていくのではないだろうか。

人は誰しも一人では生きてはいけない。相手と共存していくために、人には思考があり、言葉があるのだと私は思う。

韻文部門 短歌の部

最優秀作

情報工学科 三年 山本雅人

砂浜にこつそり建てた僕の城誰も
知らずに波に吞まれる

佳作

情報工学科 三年 宮成祐輔

致死量の切なさ吸ってさよならと
吐いた言葉は二度と還らず

機械工学科 二年 岩田隆正

ひっそりと家を抜けだし森の中み
んなが待つてるあの秘密基地

情報工学科 二年 白川凌太

左手のフォークで器用にパスタ巻
くそんなしぐさにもキュンとする

情報工学科 三年 利光信太郎

夏来たとのろしを上げる入道雲夏
の暑さを雨でかき消す

機械工学科 二年 河野祐斗

追いかける君の背中はまだ遠く近
づいてはまた離れて行くよ

機械工学科 二年 衛藤聡史

狙うほど遠ざかるのは心さえ見透
かされているからなのか

機械工学科 三年 梅木瞳

哀しみの深さがゆえに凜と咲く薄
紫の雪割の花

電気電子工学科 三年 後藤大輝

天仰ぎ頬の涙を隠してる白黒の空
あじさいの花

情報工学科 二年 芦刈菜奈美

朱がさすほった隠す茜色肩を並
べて歩く坂道

都市・環境工学科 三年 佐藤弘章

甲子園晴れの舞台の裏側に周りの
支えと敗者の涙

情報工学科 二年 藤山菜央

「大嫌い」何度も唱えてみたけれ
ど胸に秘めたる想いは消せず

情報工学科 二年 亀井泰成

ゆれ動く車内で感じるなつかしさ
トンネルぬけていつもの潮風

短歌選評

竹内 乃里子

今回は、短歌部門に八十名の応募があった。歌数は延べ百五十首ほど。その中から優秀作品十三首を選んだ。三年山本雅人君の最優秀作は、下句「誰も知らずに波に吞まれる」の切なさが抜群であった。宮成祐輔君の「二度と還らず」も似通った趣があった。「致死量の切なさ」という表現が巧みである。二年岩田隆正君の作品の魅力は秘密を共有する仲間とのわくわく感、「みんなが待つてる」という「これから感」もいい。白川凌太君の作品は、恋の歌「相聞歌」。よくある場面かもしれないが、清潔感があつて好感が持てる。三年利光信太郎君は、非常にうまいと感じた。ただ、初句「夏来た」と、四句目「夏の暑さを」が重なってしまった。「大地のほてりを」などとすると完璧。二年河野祐斗君、衛藤聡史君、両君の作品に共通するのは、かなわぬ恋だ。多くの学生に共感を呼ぶと思われる。短歌は「悲しみを美しくする器」である。つらいことも、このように詠うとよい思い出になるだろう。そのことを三年梅木瞳さんが「雪割の花」の可憐な比喻で表現した。「哀しみ」は人を美しくするし、優しくもする。勇気をもって、これから来るであろう様々な理不尽に向かつて行ってほしい。述べたいことはまだあるが、紙面に限りがあるので、諸君の力作に敬意を表して筆をおく。

韻文部門 俳句の部

最優秀作

都市・環境工学科 二年 久門 祐介
送り火やまた逢う日まで約束し

佳作

機械工学科 二年 池 見 光士郎
網を持ち虫取る子供ら見なくなり

機械工学科 二年 佐藤 叶
蟬たちが道でころころ通せんぼ

機械工学科 二年 赤嶺 大
透明な足跡たどるとカタツムリ

電気電子工学科 二年 三浦 佳之
日に焼けてやさしく火照るミニトマト

電気電子工学科 二年 佐藤 恵
賑やかな屋台の並ぶ夏祭り

電気電子工学科 二年 津江 基輝
田んぼ道緑溢るる夏の海

情報工学科 二年 芦 刈 茉奈美
暗闇にぼつりと光る蓮の花

情報工学科 二年 渡邊 優樹
風鈴の喜びだけをエキストラ

情報工学科 二年 鎗丸 郁美
稲光大きな声で自己主張

都市・環境工学科 二年 佐藤 駿之介
カレンダー一枚全部夏休み

都市・環境工学科 二年 司城 はんな
蟬の声全部押しつけ響いてる

機械工学科 三年 川野 道央
七瀬川水面にうつる夏の月

機械工学科 三年 梅木 拓郎
サイダーとともににはじける夏の空

機械工学科 三年 安東 廉太郎
昼下がりが鳶も鳴き止む油照り

電気電子工学科 三年 齋藤 恭吾
西瓜割り夏の匂いをただよわす

電気電子工学科 三年 西尾 成植
甲虫つの一本の力持ち

電気電子工学科 三年 浜野 佑介
西瓜割り右から左から呼ぶ声よ

情報工学科 三年 伊藤 有汰
波の音心が夏に運ばるる

情報工学科 三年 瀧川 茉鈴
少年の影を見守る入道雲

情報工学科 三年 尾崎 光
梅天に街を彩る傘無尽

都市・環境工学科 三年 宮川 莉帆
蟬の声木陰に集まる女子高生

都市・環境工学科 三年 唐下 日菜妃
桃色の花びら髪にやって来て

都市・環境工学科 三年 竹田 麗
白球がミットに収まり夏終わる

俳句選評

山田繁伸

俳句の全投稿者は、二百四十人ほどで、それをはるかに超える数の俳句が集まった。学生の生活の一コマがうかがえて楽しく読ませていただいた。しかし、数の多さゆえなかなか秀作を絞り込めなかった。一応掲載の俳句を選んだが、自分の好みもあるので、いい俳句を選び損ねているかも知れない。

俳句を詠む基本は、自由律俳句と言うものもあるが、やはり五・七・五の定型に収め、更に季語を入れると言う伝統的な手法であろう。先ずは先入観を持たずに周囲をよく見ることから始めてみよう。見慣れていることもよく見てみると新しい発見がある。俳句の基本は自然であるから、豊かな自然が見えてくる。もっと言えば、その自然の一部、あるいは自然に生かされている自分が見えてくる。

最優秀作にとった久門君の作品は、「送り火」を季語として、暑い夏が見えてくる。そして亡き人に対する深い悲しみとともにまた逢うであろう来年、あるいは、いつかは必ず死すべき人の命までもしみじみと味わうことのできる作品となっている。

他の作品も自然とともに作者の心がうかがえる。じっくり鑑賞してほしい。

講評その他

山田繁伸

昨年度は諸事情によりコンクールが実施されず、「もさく」も刊行されなかった。しかし、今年度は二百数十名の学生から読書感想文が寄せられた。一次審査で二十五編に絞られ、更に二次、三次と審査が行われ、最終的に十編が決まった。上位にノンフィクションが選ばれたのも特徴的である。

第一位は、「聞く」と「聴く」の対比。「聴く力」の重要性に共感し、想像力や意思表示と関連付けて述べている。第二位は、主人公「あすか」と自分を対比して、今の自分を更に進化させようとする作者の素直な気持ちに好感が持てる。第三位は、心に深く残った言葉を引用し、それにつけた的確なコメントが評価されたのであろう。佳作のどの作品も作者の意図するところをよく読んでまとめている。また、自分に引き付けて考えている。読書感想文は、自分が作品から何を得たか、それを語るものである。評論になつてはならない。他人事ではなく自分にとって、と言う視点が重要である。

ところで、『読書と社会科学』（岩波新書）で、内田義彦氏が、「情報として読む」と「古典として読む」のとの二通りの読み方を示している。本の内容や分野で区別するのではなく、読み方、

受け入れ方の違いによる区別である。前者は、様々な情報誌を読む時のように、何か直接役立つ情報を得る読み方である。一方、後者は新しい情報を得ると言う意味では役立たないが、情報を見る眼の構造を変え、受け取り方を変える、つまり自分の生き方を変えるような読み方である。「眼のもう少し奥のところを受けとることによって、自分の眼の構造を変え、いままで眼に映っていた情報の受け取り方、つまりは生き方が変わる」と説く。内容は分かり切っている、時々読み直したくなり、その都度新たに得るものがあると言う。

そういう観点から見ると、選ばれたどの感想文も作者の変容や生き方が書かれていたのではなからうか。それらが、審査員を動かしたと思う。

今年度は、読書感想文とは別に詩歌作品を募集した。例年の「もさく」を見ると、かなりのスペースがあった。そこで埋め草と言っては失礼になるが、スペースの有効活用のために募集した。ところが、埋め草どころか、生活や思いを生き生きと詠み込んだ秀作が多く集まった。詩歌は、散文と違って純粹な心の発露である。若い今でないと描けない世界もある。その世界が今回の「もさく」を豊かなものにくれた。また、選者も専門の先生にお願いでき、適切な選評も頂いた。

投稿した学生諸君をはじめ、審査に当たった学生図書委員、図書館運営委員、イラスト作者梶原雄二君、詩歌の選者のお二方に厚くお礼申し上げます。

編集後記

学生図書委員長

(電気電子工学科四年)

平野 瑠唯

「読書は大切だ」と小さいときから周りの大人に言われてきた方は多いのではないのでしょうか。私もそうでした。私に通っていた小・中学校では、朝の決められた少しの時間を読書の時間として設けて、本を読むことをすすめていました。では、本を読むことは何が大切なのでしょう。私は読書からは得られることが多いから大切なのだと思います。本を読むことで新しい知識を得ることができ、新しい表現を手に入れることができ、想像力が豊かになります。また、自分ではない人の意見に触れることで、他人の気持ちがあわかっていくのではないかとも思います。

さて、今年もみなさんが書いた読書感想文の審査が行われました。私も審査員に加えさせていただきましたが、素晴らしい作品が多く感嘆してばかりでした。

個人の感想としては入賞者の方々は、作品の「概要」と、それに対する「自分の意見」を伝えるのが上手だったと思いました。文章もまとまっていて、引き込まれてしまう作品もありました。また、入選できなかった作品の中には

文章の内容ではなく、文法上の間違いや文体がおかしいと思われることから減点されているケースもいくつかありました。ですが、伝えたい思いがはつきりと書かれており、文章がまとまっているものもあったので、今回入選できなかった方もあきらめず次回は入選を目指して頑張っていただけだと思います。今回入賞者は全員三年生以下でした。忙しいとは思いますが、四、五年生の積極的な自主投稿をお待ちしています。

作文以外の方法で、自分の考えを表現する場として、図書委員会は読書会を主催しています。気軽に参加していただけると幸いです。

最後になりましたが、校内読書感想文コンクールを開催するためにご尽力いただきました先生方、関係者の皆様、作品を投稿してくれた学生の皆様、本当にありがとうございました。



平成26年度 読書感想文入選作品一覧

作品名	著者名	出版社等
フィンランド教育 成功のメソッド	諸葛 正 弥	毎日コミュニケーションズ
ハッピーバースデー	青 木 和 雄	金の星社
置かれた場所で咲きなさい	渡 辺 和 子	幻冬舎
氷雪の門	松 山 善 三	潮出版社
告白	湊 かなえ	双葉社
形	菊 池 寛	新潮社 岩波書店 他
高瀬舟	森 鷗 外	集英社 新潮社 角川書店 他
負けかたの極意	野 村 克 也	講談社
沈黙	村 上 春 樹	文藝春秋 レキシントンの幽霊所収
心の国境をこえて—アラブの少女ナティア	ガリ・ロンフェイル・アミット 著 母 袋 夏 生 訳	さえら書房

「むねく」 第四十一号

発行日

平成二十七年一月二十八日

発行者

大分県大分市牧一六六六番地

大分工業高等専門学校

学生図書委員会

図書館運営委員会

印刷所

三和印刷出版株式会社

住所

大分市高江西二丁目四三三三二二

電話

〇九七―五九六一七七〇〇

